12
二葉
小
社202

教育學部
資料室

なかよし

教科書文庫
6
301
34-1950
0130449977

文部省検定済教科書
新教育実践研究所編

KD
F97

第二学年(全)

60012
教科書文庫
6
300
34-1950
01304
49977

寄贈
教科書文庫
6
301
34-1950
0130449977

みんな　なかよく

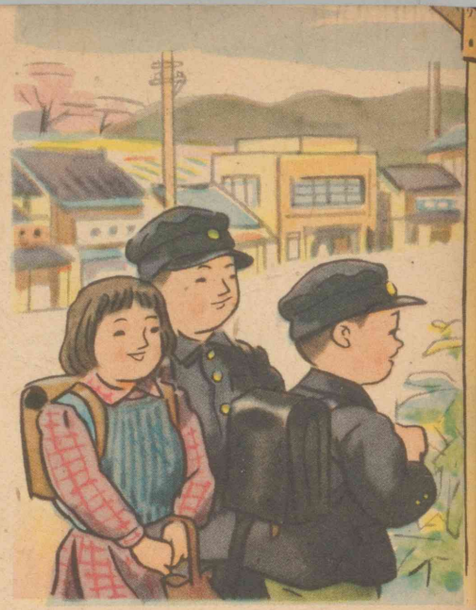
わたしたちは、みんな　なかよく　べんきょうを
したり、おてつだいを　したり、あそんだりします。
きんじょの　人も　みんな　なかよしです。町の
村の人も、みんな　なかよしです。
わたしたちは、この　ご本で　あきらくんや
まち子さんが　どんなに　なかよくしているか
町の　人や、村の　人が、どんなに
なかよくしているかを、べんきょうしましょう。

中央図書館
廣島大學
広島大学図書
0130449977
広島大学図書
0130449977

みんな　なかよく

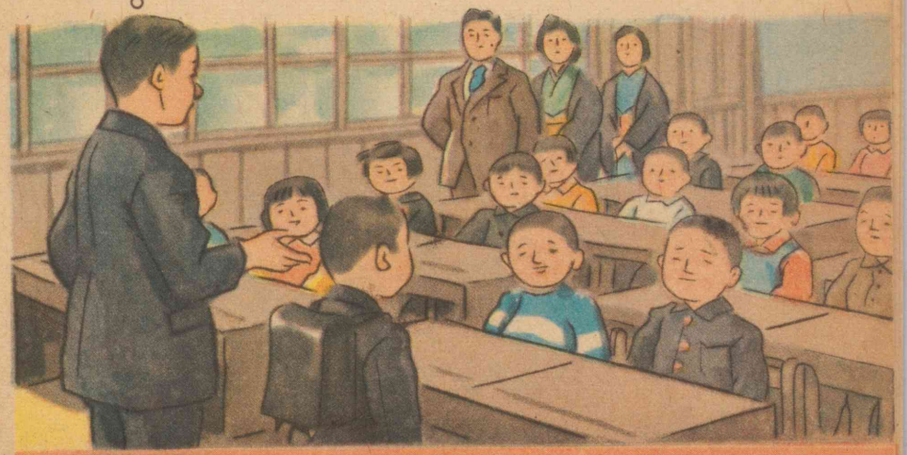
あきらくんたちは、学校へいく
とちゅうで、しげるくんを　さそいました。
しげるくんは、この　あいだ　きんじょに
こして　きた　**あたらしい　ともだちです。**
「しげるくん。」
と　よぶと、
「はあい。」

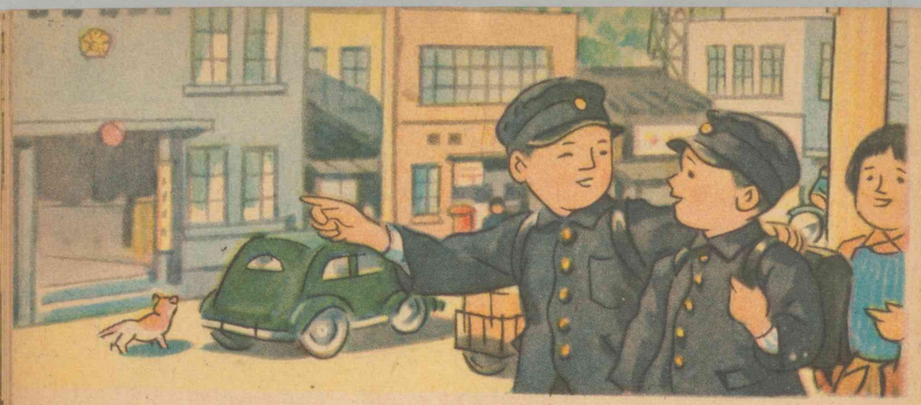
と　いって、げんきよく　でて　きました。
おばさんも　にこにこしながら、
「おまちどうさま。みんな、きょうから　二年生ね。
あしたから　一年生も
にゅうがくしますね。」
と　おっしゃって、
いっしょに　でかけました。
もう、あちら　こちらの
さくらも、さきはじめて
います。



学校に　ついてから、
校ちょう先生の　おはなしを
きいて、きょうしつに
はいりました。先生が
しげるくんを　つれて
いらっしゃって、
「きょうから、しげるくんが　みなさんの　なかよしに
なります。さあ、いっしょに　ごあいさつ　しましょう。」
と　おっしゃいました。みんな、にこにこしながら
あいさつしました。しげるくんの　せきは、あきらくんの

となりに　きまりました。
先生が、
「これから、しげるくんに、
どう　して　あげたら
いいでしょうね。」
と　おっしゃいました。みんな、
いろいろ　かんがえて　こたえました。
しげるくんは　うれしそうに、
みんなの　はなしを　きいて　いました。
学校が　おわってから、また



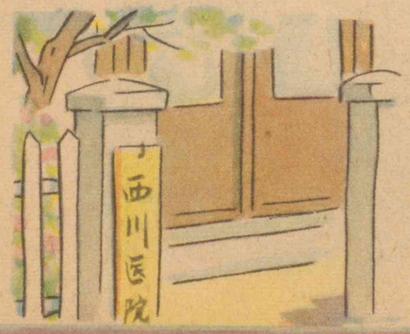


あきらくんたちは、しげるくんと
いっしょに　かえりました。
しげるくんの　いた　いなかと
ちがって、町には　みせが
たくさん　ならんで　います。
ゆうびんきょく、けいさつしょ、
やくば、しょうぼうしょなど、
大きな　たてものも　あります。
いろいろな　のりものも
とおって　いるので、しげるくんは、

めずらしそうに　みて　いました。
あきらくんも、花子さんも、
町の　ことを　いろいろ　おしえて
あげました。
しげるくんは、中町の　こうえんの
四つかどで　さようならを　して、
みんなと　わかれました。
あきらくんが　うちに　かえると、
おとうさんが、

「あとで　西川さんの　ところへ、**おつかい**に　いって　きて
おくれ。これを　とどけるだけで　いいから。」と　いって、
つくだにの　つつみを　だしました。
「はい。西川さんは、けいさつの
そばの　おいしゃさんでしょう。」
「そうだよ。べんきょうが
すんでからで　いいからね。」
あきらくんの　うちは、かんぶつやさんです。
おとうさんが　いそがしいので、よく　おつかいを
たのまれます。あきらくんは、べんきょうを　すませて、

おつかいに　いきました。あとから
ポチが　はあはあ　いって、かけて
きました。まち子さんが　むこうから
きたので、
「どこへ　いくの。」
と　きくと、
「ポストに　はがきを
いれに　いくの。」
と　いいました。
西川さんの　うちは



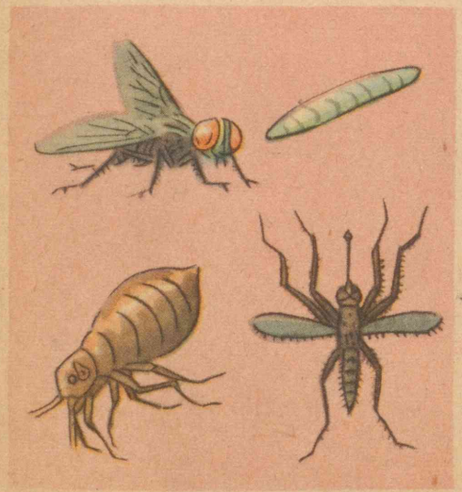
すぐ　わかりました。だいどころの
ほうへ　いくと、おばさんが
いました。おじぎを　してから、
「つくだにを　もって　きました。」
と　いって、つつみを　わたしました。
「どうも　ありがとう。よく
おつかいが　できて　えらいわねえ。」
と、おばさんが　ほめて　くれました。
あきらくんは　うれしくなって、
ポチと　きょうそうしながら

かえりました。もう　日が　しずみかかって、
町には　でんとうが　ついて
いました。ゆうはんの　とき
おとうさんが、「そろそろ
はえや　かが　でて　くるから、
町でも　大そうじを　はじめるだろう。
と　おっしゃいました。
きょうは、よく　はれた
にちょう日です。どこの
うちでも、あさから　**大そうじ**を

はじめました。うちじゅうの　人が、マスクを
かけて　はたらきました。あきらくんは
本ばこを　かたづけました。しげるくんは
子もりを　しました。おひるすぎに　きんじょ
の人たちが　あつまって、げすいや、
きょうどういどを　そうじしました。げすいの
中から、どろどろした　くさい　土を
あげて、きれいに　しました。
あきらくんも　てつだいました。
きんじょの　人たちは、

「だいぶ つまって いましたね。」
「ほんとに、これでは はえやかを、だいじに そだてて いたような ものだ。」などと いいました。その うちに、わんしょうを つけた ほけんじょの 人たちが きて、
「やあ、ごくろうさま。きれいに なりましたね。では、さっそく――。」と いって、デーデーテーを まきました。そうじの

おわった あとは、どこも きれいに なりました。
あきらくんは、この あいだの よぼうちゅうしゃの ことを おもいだして、ほけんじょの 人たちは、いろいろな しごとを するのだなと おもいました。
きょうは、学校で **おみせやごっこ**を しました。

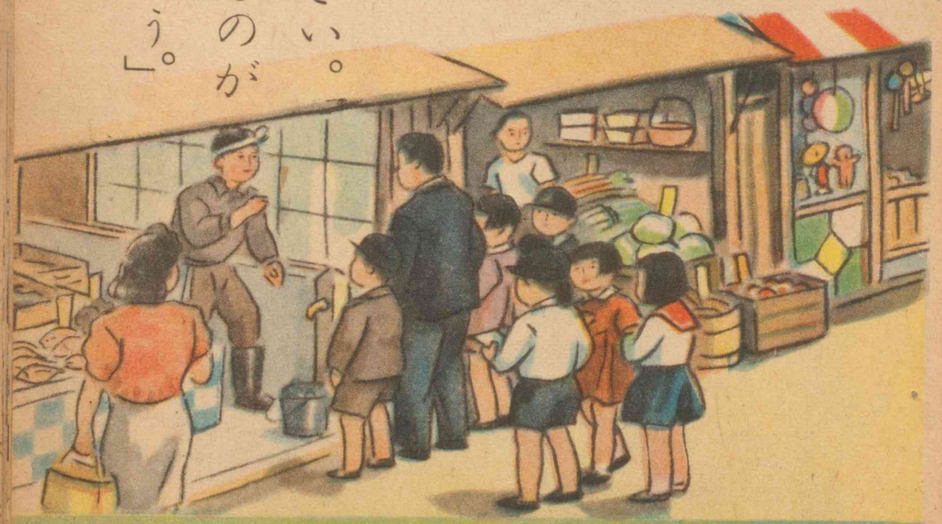


みせは　さかなや、やおや、
かんぶつや、本や、花やなどに
きまりました。しげるくんは
いなかから　きたので、やおやに
なりました。あきらくんは　かんぶつやに
なりました。みんな　きょうしつや
ろうかを　うまく　つかって、
べつべつに　みせを　つくりました。
それから　しなものを　つくったり、
おかねを　つくったり　しました。

みんな　にこにこして、
うれしそうです。さかなやに
なった　ただしくんが、
はちまきを　して、
「さあ、いらっしゃい、
いらっしゃい。」
と　大ごえで　いったので、
みんな　わらいだしました。
先生も　かいてに　なって、
さかなやへ　いきました。

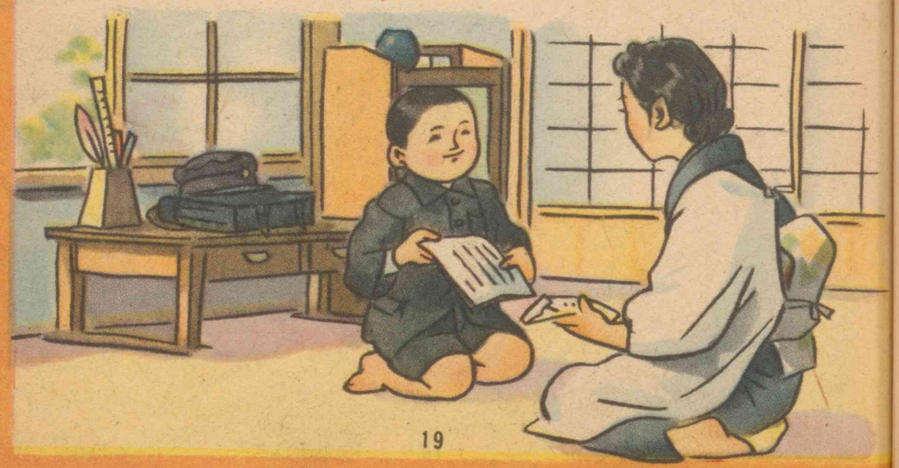
「そのたこを　二ひき　ください。
足は　八本　ありますか。」
と　おっしゃいました。よく
みると、足が　十本　ありました。
ただしくんは、あたまを
かきました。そばに　いた
みよ子さんが、
「たこと、いかを　まちがえたのね、しっぱいよ。」
と　いって　わらいました。
だんだん、うりかいが　さかんに　なって　きました。

花やさんの　あき子さんが、
「先生、もう　うりきれて
しまったのに、まだ　かいに
くるのですよ。」
と、こまった　ような　かおを
して　いいました。
先生が、
「みんな、ちょっと　おやめなさい。
町の　みせでは、うる　しなものが
なくなると　どう　するでしょう。」



と、おっしゃいました。
みんなは いろいろ
かんがえましたが、よく
わかりません。
ただしくんが、
「町の みせに いって、
きいて みよう。」
と いいました。みんなも
さんせいしました。

しげるくんの いた 村へ
しげるくんが かえって みると、
うれしい たよりが きて いました。
まえに いた うちの、おじさんから
きたのです。それには、
「うまれたばかりの 子うしや、
山の くりの みが、
しげるくんを まって
いるから、にちよう日に



おともだちを　さそって、あそびに
いらっしゃい。」と　かいて　ありました。
おかあさんが、「しげるさん、いいわね。
あきらさんたちを　さそって、こんどの
にちよう日に　いって　いらっしゃい。」
と　おっしゃったので、
しげるくんは　大よろこびで、すぐ
あきらくんの　うちへ　いきました。
あきらくんと、ねえさんの　はる子さん、それに
まち子さんの　四人で　いく　ことに　きまりました。

にちよう日の　あさ、みんなは
バスの　ていりゅうじょに
あつまりました。おじさんの
うちには　二年生の　きよしくんが
いるので、おみやげに
えんぴつを　一ダース　かって、
はる子さんが　もちました。
はしって　いる　**バスの　中**で、
そとの　けしきを　みながら、
四人は　しずかに　はなしました。

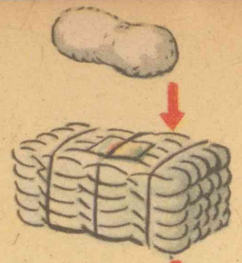
すれちがう　トラックには、
やさいを　いっぱい　つんで
いるのも　ありました。
だっこくきを　つんで　いる
にばしゃを、おいこしたとき、
しげるくんは、
「あっ、あれは、ぼくの　おとうさんの
かいしゃで　つくったのかも　しれない。」
と　みんなに　はなしました。
四人は、村の　いりぐちで　バスを　おりて、大きな

木に　かこまれた　**おじさんの**
うちへ　いきました。
うさぎに　えさを　やっていた
きよしくんが、まっさきに
みつけて、「しげるくん。」
と　いいながら　かけて
きました。おじさんも
にこにこしながら　でて
きて、
「よく　きたね。おじさんは

みんなの　くるまで、
たんぼに　いかないで
まっていたよ。」
と　いわれました。
「子うしは　どこに　いるの。」
と　しげるくんは、まちきれないように
ききました。「よし、よし。それでは、
子うしを　みせたり　ちちでも
しぼって、みんなに　ごちそうしたりしようね。」
四人は　きよしくんと　いっしょに、うしごやの　ほうへ

かけて　いきました。
かわいい　子うしを　みて　いると、
「どうだ　しげるくん、ちちを
　しぼって　みないか。」
と　おじさんが　いわれました。
みんなは　かわるがわる　おしえて
もらいながら、やってみま
した。うしは、おとなしく
えさを　たべていました。
おじさんは、

「村には　たくさん　ちちうしが
いるので、まいあさ　しぼったちちを
あつめて、町へ　じどうしゃで
はこんでいるよ。」と
はなして　くれました。
あきらくんが、「ぼくが　うちで
のんでいるのは、この　うしの
ちちかも　しれないね。」
と　いいました。それから、うさぎや
めんようを　みせて　もらいました。



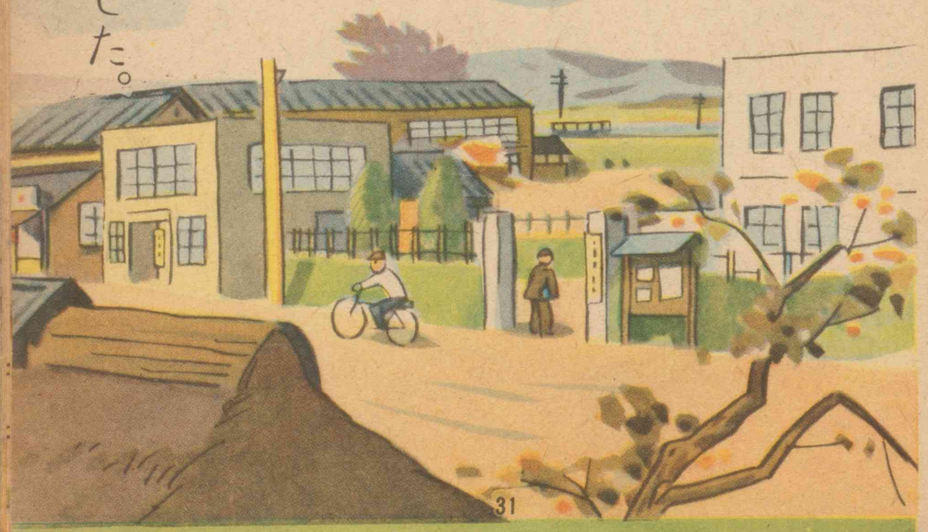
あきらくんも、まち子さんも、めんようの　けで
えりまきや、ようふくを　つくる　はなしを　きいて、
びっくりしました。きよしくんの　うちでは、かいこの
まゆで　きぬの　きものを　つくるそうです。
まち子さんが、
「いなかの　うちと、町のうちと、
ずいぶん　ちがうわねえ。」
と　かんしんしたように　いいました。
「にわだって、ひろいし、たべものも
たくさん　とれるし、いろいろな

どうぶつを　かうことも　できて
いいなあ。」と　あきらくんが
いいました。「うちの　たてかたも、
ずいぶん　ちがうわね。」
と　はる子さんが　いいました。
そこへ　きよしくんの　おばあさんが
あかちゃんを　おぶって、
たんぼからかえって　きました。
おばあさんは、火を　たいて、おゆを
わかして　くれました。みんなは　いろりの　そばで、

ひるごはんを　たべました。しげるくんは
にぎやかな　町の　ようすや
げんきな　おとうさん　おかあさんの　ことを、
おばあさんに　はなしました。
みんなは　きよしくんと　いっしょに、すこし
はなれた　山へ、**くりひろい**に　でかけました。
おじさんたちが　たんぼで　はたらいて　いるので、
いく　とちゅう、おちゃを　はこぶ　ことに　しました。
やくば、学校、ちゅうざいしょ、ほけんじょ、人の
いない　火のみやぐら、ポンプおきばなどを　みながら

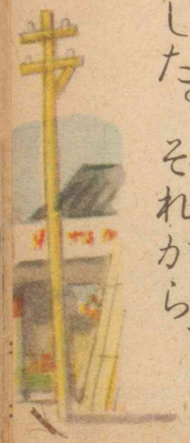
あるいて　いきました。やくばの
そうこの　まえでは、村の　人たちが
あたらしい　おもそうな　たわらを、
はかりに　かけて　いました。
「お米の　きょうしゅつね。」
と　あきらくんの　ねえさんが
いいました。モーターを
とりつけた　だっこくきを
つかって、おおぜいで
しごとを　している　のうかも

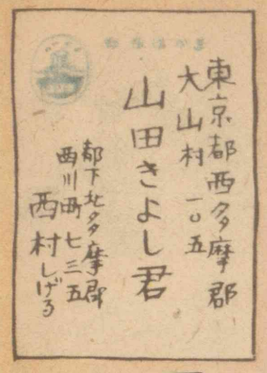
ありました。いねの　もみが
だっこくきに　かけられて、
きれいに　とられて　いきます。
モーターの　音は、いせいよく
いつまでも　きこえて　いました。
きれいな　小川の　そばの
たんぼみちを　とおって、
きよしくんの　うちの　たんぼに
つきました。みんな、
いっしょうけんめい　はたらいて いました。



「くりを、たくさん　ひろって　おいでよ。」
と　おじさんが　いいました。四人は
きよしくんの　あとに　ついて、山へ
いそぎました。
ゆうがたちかく、しげるくんたちは
ひろった　くりを　おもそうに　さげて、
かえって　きました。まだ　たんぼには
きよしくんの　おとうさんたちの
はたらいているのが　みえました。四人は　こえを　そろえて、
「さようなら。」と　いいました。あきらくんの　ねえさんが

「いい　おじさんたちね。」
と　しげるくんに　いいました。
みんなは　おばあさんから、
おみやげの　かきを　いただきました。
きよしくんは、バスの　ていりゅうじょまで
おくって　きました。そして、お正月に
町へ　いく　ことを、やくそくして　わかれました。
バスの　中で、あきらくんの　ねえさんが、
「おれいの　手がみを　だしましょうね。」
と　みんなに　いいました。それから、

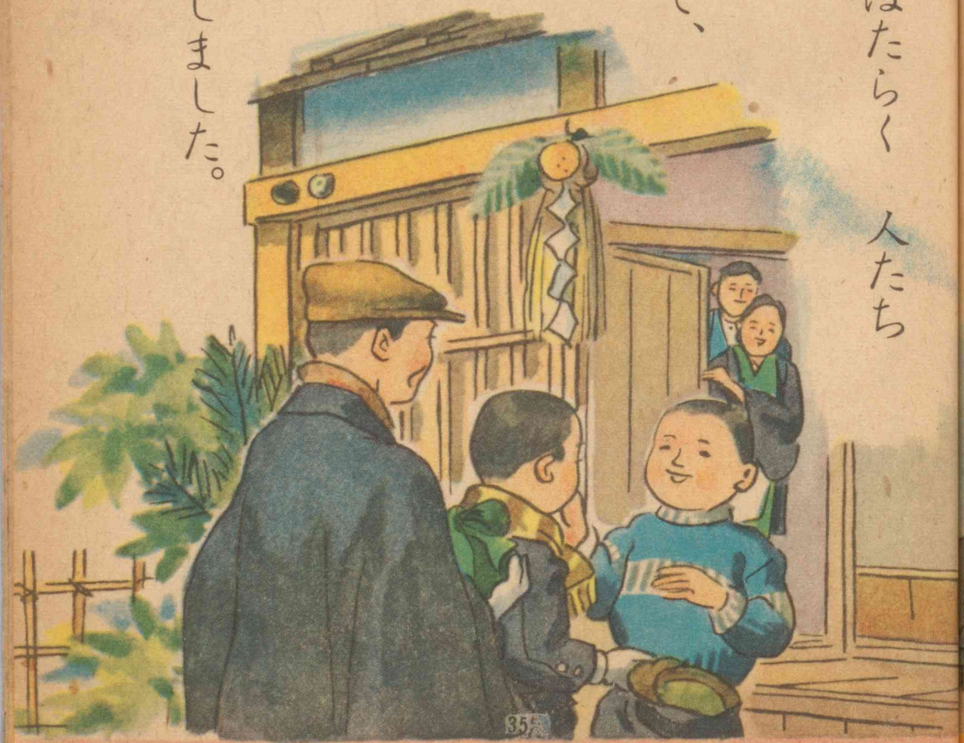




お米を　つくる
じゅんじょや、
のうかの　人たちの
くろうなどを　はなして
くれました。
だんだん　町が
ちかづいて、
でんとうの
ひかりが
みえだしました。

みんなの　ために　はたらく　人たち

「ごめんください。」
と　いう　こえが　したので、
しげるくんは　すぐ
げんかんに　でてみました。
それは、おじさんと
きよしくん　でした。
しげるくんは　ふたりに、
しんねんの　あいさつを　しました。



おじさんが、「いなかは、ゆうべ　ずいぶん　雪が　ふった。」と、おとうさんたちに　はなして　います。

きょうは　三時の　きしゃで、みなと町の　おじさんも　いらっしゃいます。

二時半に　なったので、しげるくんは　おとうさんと　きよしくんの　三人で、**むかえに**　でかけました。

ところどころに　雪が　のこって　いる　みちを

えきへ　いそぎました。

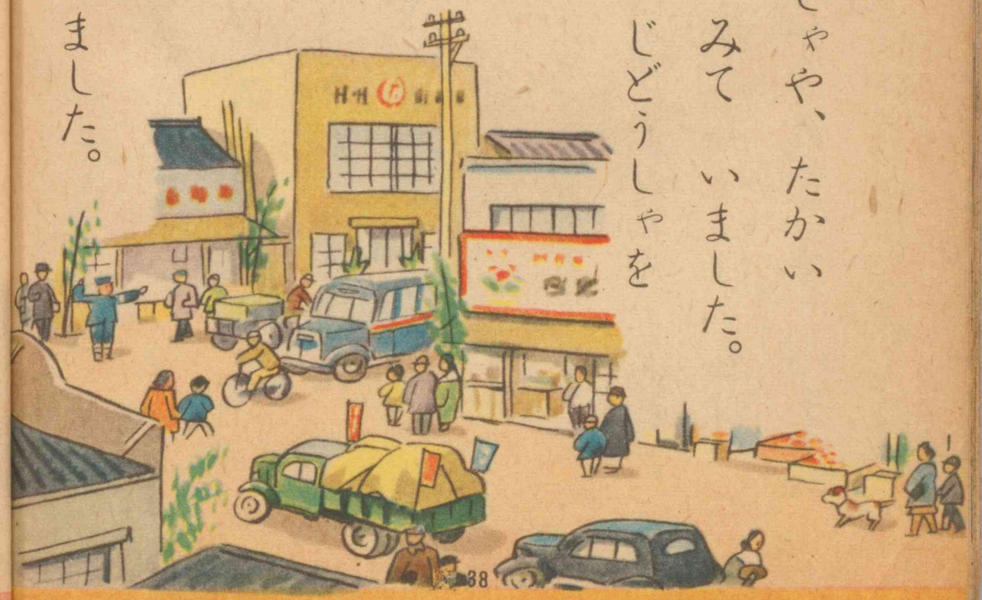
きよしくんが、

「町の　みちは、雪の　とけるのが　ずいぶん　はやいね。」

と　いいました。

きれいな　きものを　きた　おんなの　子たちが、あちらこちらで　はねつきを　して　います。しょうぼうしょの　火のみやぐらよりも　たかく、たこが　あがって　います。

きよしくんは　しょうぼうじどうしゃや、たかい
火のみやぐらを、めずらしそうに　みて　いました。
しょうぼうしょの　人が　四五人、じどうしゃを
そうじして　いました。
人が　大ぜい　でて　いるので、
町の　四つかどでは、
おまわりさんが
こうつうせいりを　して　います。
えきに　ちかい　ところで、
きんじょの　おいしゃさんに　あいました。

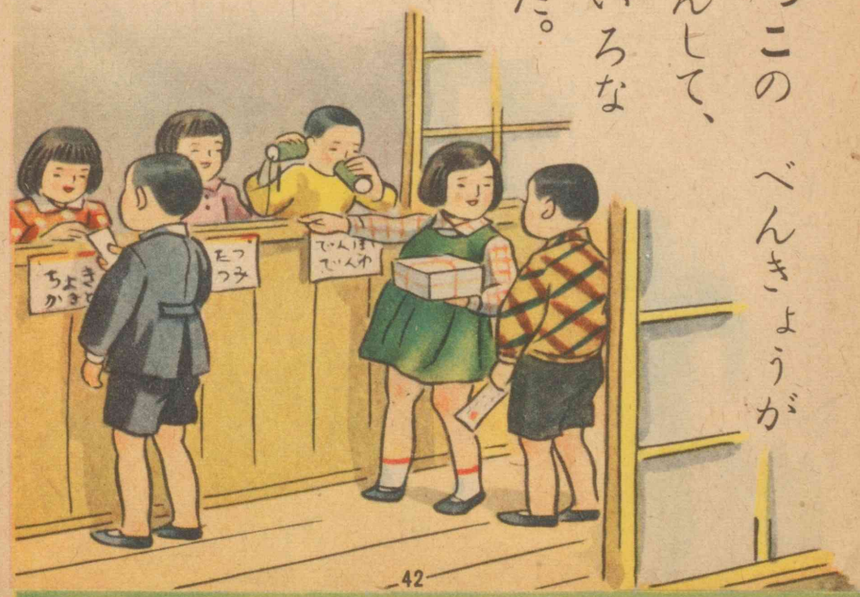


「お正月でも　おいそがしそうですね。」
と、おとうさんが　あいさつしました。
「びょう人には、お正月も
おやすみも　ありませんからね。」
と、おいしゃさんは　わらいながら、
いそがしそうに　あるいて　いきました。
まも　なく　きしゃが　ついて、日やけした
おじさんが　わらいながら　おりてきました。
えきの　人たちも、いそがしそうに
はたらいて　います。

しげるくんと　きよしくんは、あるきながら
おじさんに　さかなとりの　はなしを
ききました。かえって　みると、
あきらくんたちが　あそびに　きて
いました。みんなは　おじさんたちも
いれて、**かるたとり**を　しました。
それは　しげるくんの　つくった
かるたです。
みんなの　ための　おまわりさん
こどもも　いっしょに　火の　ようじん

からだを　まもる　おいしゃさん
てがみより　はやい　でんぽう
おじさんたちが、
「いい　かるたを　つくったね。」
と　かんしんしました。
おそく　なったので、しげるくんは　おかあさんと
いっしょに、あきらくんたちを　大どおりまで
おくりました。くらい　ろじで　おまわりさんに
あいました。「ごくろうさんです。」
と　おかあさんが　あいさつしました。

きょうから、学校で　**ゆうびんごっこ**の　べんきょうが
はじまります。みんなは　そうだんして、
ゆうびんごっこに　つかう　いろいろな
ものを　つくる　ことに　しました。
あきらくんが、
「いなかと　町に　わかれて、
てがみを　やりとり　すると
いいね。」
と　いったので、みんなで
しごとを　わけて、なかよく



したくを　はじめました。
あきらくんは　ゆうびんやさんに
なりました。あてなの　はっきり
かいて　ある　てがみは、すぐ
はいたつ　できますが、
かきかたの　わるいのは、
どこへ　はいたつしたら
いいのか、わからなくて　こまりました。
でんぽうは　とくべつ　はやく　とどけなければ
ならないので、なかなか　たいへんでした。

いろいろな　しごとを　かわるがわる
やって　いる　うちに、みんなは
ほんとうの　ゆうびんきょくが　みたく
なりました。先生と　いっしょに、
ゆうびんきょくの　中を　みせて
もらいました。それから　しげるくんの
くみは、ゆうびんごっこが　じょうずに
できるように　なりました。
先生が、
「ゆうびんきょくの　人たちの　ように、

みんなの　ために　はたらいて　いる
人が、ほかにも　ありますか。」
と　おききに　なりました。
「しょうぼうしょの人。」
「おまわりさん。」「えきの人。」
「ほけんじょの人。」
などと、みんなは　げんきよく
こたえました。
先生が、
「みんなは　もう　じき　三年生だから、そういう

人たちに　めいわくを　かけないように　しましょう。」

と　いわれました。

しげるくんは

「火のようじんを　すれば、

しょうぼうしょの　人が

あんしんすると　おもいます。」

と　いいました。

かず子さんは、

とじまりを　よく　したり、あぶない

ところで　あそんだり　しなければ、おまわりさんの

ごくろうが　すくなく　なると

おもいます。」

と　いいました。みんなも　いろいろ

こたえました。しげるくんたちは　**もう**

じき　三年生になるので、一年かんに

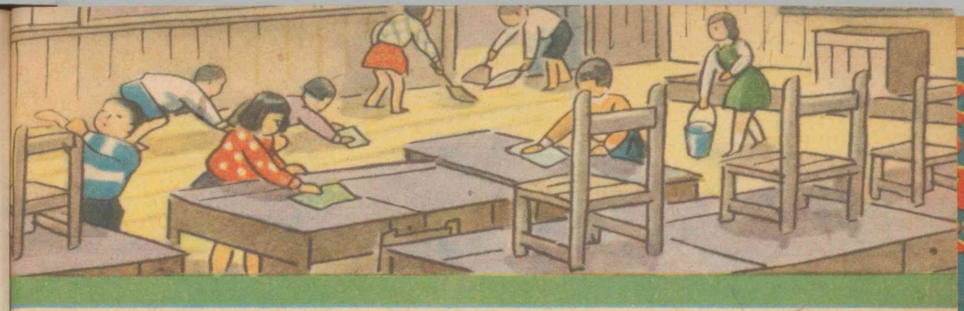
べんきょうした　ことを、

めいめいで　せいりして　みせあいました。

二年の　はじめに　かいた、ちょうめんの　じや　えや

さく文などを、いまの　ものと　くらべて　みると、

じょうずに　なった　ことが　よく　わかりました。



いよいよ　二年生も　おわりに　なったので、
みんなは　きょうしつの　大そうじを　しました。
あきらくんは、こんど　かわる　三年生の
きょうしつを　みて　きて、とくいそうに
はなしました。しげるくんは　なんかいも
じぶんの　つくえを　ふいて、きれいに
しました。そして　ちいさな　こえで、
つくえに、
「さようなら」
と　いいました。

先生方と御両親のために

この本は、二年生の社会科の教科書としてつくられたものです。編さんの方針としては学習指導要領、社会科篇1と、その補説の趣旨を表わすことにつとめるとともに、子供の生活と、発達とに即することを旨としています。そのために、子供の直接の経験している近隣の生活を足場として、子供の生活の動きによって、いつも見聞しているような場面を通して、社会がどのように協力しているか、またその協力によって、人々の互に依存しあっている生活が、どのように営まれているのかを、子供の程度に応じて、理解させるように工夫しました。そしてこの理解によって、やがて子供たちが、この協力する社会に適応していく生活にふみ出せるように、その心持を誘導することをも考えてみました。

以上は全体を通じての方針ですが、特に第一の「みんななかよく」では、子供の近隣生活、学校生活を中心にして、その直接の経験に照応して、生活の協力を理解させることに重点をおきました。この指導によって、子供が進んで、なかよく、協力しようとする心を刺戟するようにありたいと思います。

つぎに第二の「しげる君の村へ」は、子供の農村をたずねる情景を描いて、これによって、まえとの関係で、農村と都市との相互依存の関係を理解させ得るように考えました。農村の子供はこれで、町の生活と農村との関係を、都市の子供は、これで、その農村との関係を理解するように、進んでは、相互の協力の心と、感謝とを子供ながらにいだくように、指導されたいと思います。

最後に、第三の「みんのために働く人々」は、公共のために働いている人たちの事業を、子供の生活と関連して、描いてあります。これによって、子供たちが、これらの人々の生活を理解すると同時に、社会に対する信頼感を助長し、感謝の念を導くようにありたいものです。

12	小	社202
二葉		

なまえ

えを かいた ひと
藤沢龍雄
ふじさわ たつお

Approved by Ministry of Education (Date Mar. 1, 1950)

なかよし（小学校社会科第二学年全）

印刷 昭和25, 3, 1
発行 昭和25, 3, 5　　文部省検定済昭和

著作者　青木誠四郎　植田正次　室井光義　片岡竜一
染田屋謙相　松村　謙　木川達爾　小山昌一
森田康之助　野口竹夫

発行者　二葉株式会社　代表者 大野治輔　東京・北・稲付1－208
印刷者　二葉株式会社　代表者 大野治輔　東京・北・稲付1－208

二葉株式会社　東京・北・稲付1－208

定価¥

葉株式会社

広島大学図書
0130449977